

北海道釧路市幣舞遺跡出土の独鈷石について

西 幸隆* 石川 朗*

Dokkoishi from Nusamai Site in Kushiro,
Eastern Hokkaido

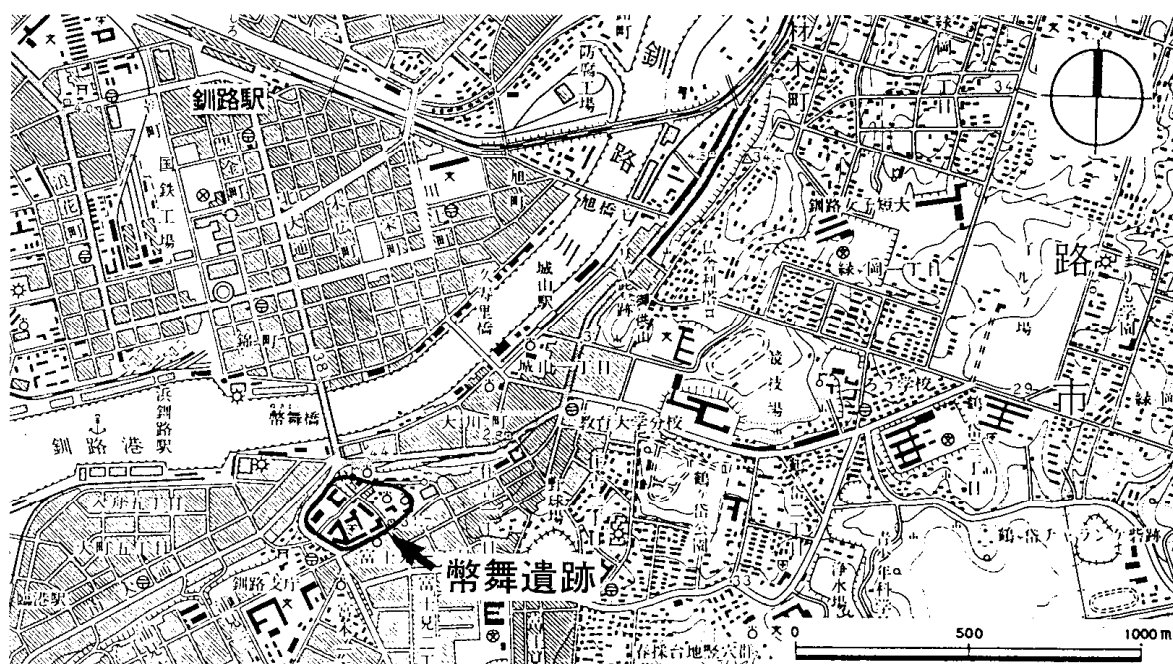
Yukitaka Nishi* Akira Ishikawa*

はじめに

平成2年9月4日、当時釧路市米町在住の近藤昌夫氏より釧路市埋蔵文化財調査センターへ122点の考古資料が寄贈された。採集地が明らかな遺物の多くは釧路管内であるが、ほぼ全道に及んでいる。遺物は、近藤氏の祖父にあたる近藤虎三郎氏の蒐集品であり、その後、父の虎蔵氏へ受け継がれ、さらに昌夫氏が保管していたものである。土器片3点のほかは石器類で占められており、石鏃、石槍、石匙、削器、石錐、磨製石斧、装身具、石冠、砥石、石棒などと共に、独鈷石1点と独鈷石の未製品とみられる石器が1点含まれていた。

独鈷石は、測候所出土とあり、かつて河野常吉氏が実見した資料そのものであり(註1)、河野広道氏により報告された幣舞遺跡出土の5点のうちの1点であった(河野1958)。未製品についての記録はなく、出土地は明らかではない。

北海道出土の独鈷石については、最近では杉浦重信氏により集成されているところであり(杉浦1991)、国後島出土の1点を加え16点が紹介されている(註2)。本稿では、今回寄贈された独鈷石及び出土地不明の未製品と共に釧路市埋蔵文化財調査センターに展示されている2点を加え幣舞遺跡出土の独鈷石について再度報告したい。



第1図 釧路市幣舞遺跡位置図

* 釧路市埋蔵文化財調査センター

尚、実測図の作成は筆者のひとり石川が担当した。また、写真の撮影は釧路市立博物館加藤春雄氏にお願いした。ここに厚く感謝申し上げる次第である。

釧路市幣舞遺跡について

本遺跡は、釧路市幣舞町1～4番地に所在し、釧路川左岸の標高20～25mの台地に位置する。縄文晩期の幣舞式土器の標式遺跡として知られる。現在の釧路市公民館、市立釧路図書館、釧路市生涯学習センターを中心として付近一帯に広がりをもつ比較的規模の大きな遺跡である。明治21年、坪井正五郎により紹介された釧路貝塚もこの台地に存在したと言われ(澤1966)、かつては擦文期の竪穴住居跡やヌサマイチャシコツの存在したところでもある。昭和30年から開始された富士見坂の開削工事やその後の工事において大量の遺物が採集されている。また、昭和35年には富士見坂崖面の工事に伴う発掘調査が行なわれ(澤1966)、昭和43年にも釧路市公民館横の水道工事に伴う調査で縄文晩期の墓壙が検出されている(澤1974)。その後、平成元年度に釧路市生涯学習センターの建設工事に伴う発掘調査が行なわれ、縄文早期、晩期、擦文期の竪穴住居跡、墓壙が検出されている(西・石川1990)。遺構・遺物の主体を占めるのは、縄文晩期後半から末葉にかけての幣舞式、緑ヶ岡式土器の時期である。

幣舞遺跡出土の独鈷石

本遺跡からは、上述したように河野広道により5点の独鈷石が紹介されている。すべて同一箇所からの発見ではなく、それぞれ地点を異にしている。釧路地方気象台敷地(測候所)、釧路市生涯学習センター敷地(旧市立病院前庭)、釧路支庁官舎敷地、市立釧路図書館敷地(旧釧路市役所)、釧路市公民館敷地と径300mの範囲に及んでいる。このうち、旧市立病院及び旧釧路支庁官舎出土の2点について

所在は明らかでない。

(1) 釧路地方気象台敷地出土(第2図1)

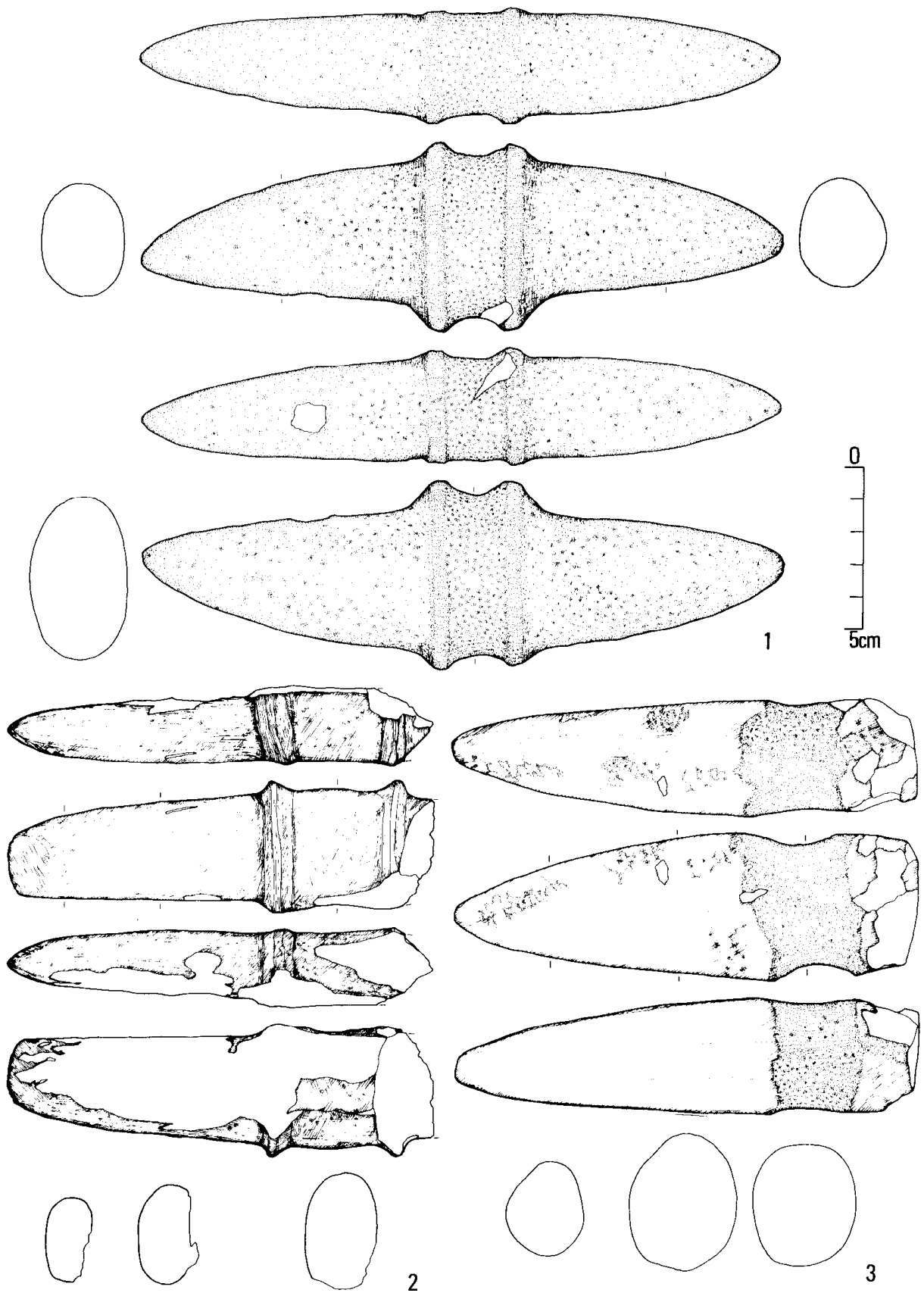
今回、近藤昌夫氏により寄贈された。測候所と記されている。「河野常吉ノート」(宇田川校註1983)の第112図の資料で、その後これをもとに河野広道氏により形状・寸法が紹介されている(河野1958)。長さ20.0cm、幅5.8cm、厚さ3.5cm、重さ410.2gを計る完形品である。モンズン岩質。ほぼ中央に幅2cmの溝をもち、断面三角形を呈する幅0.5cm前後の二条の節が縦にめぐらされる。断面形はむしろ二等辺三角形と表現した方が正確で上面で幅0.3cmの平坦部分をもつ。裏面では表面ほど高まりをもたず、磨り減ったような印象を受ける。ほぼ左右対称の形態をもつ。断面形は両端部を除いて楕円形を呈する。全面が丹念に研磨されており、溝内部は緻密ではないが両端部ではツルハシ状に入念に磨かれている。石斧状の刃部形態をもたず、尖鋭に加工された端部での打撃痕も観察されない。

(2) 市立釧路図書館前出土(第2図2)

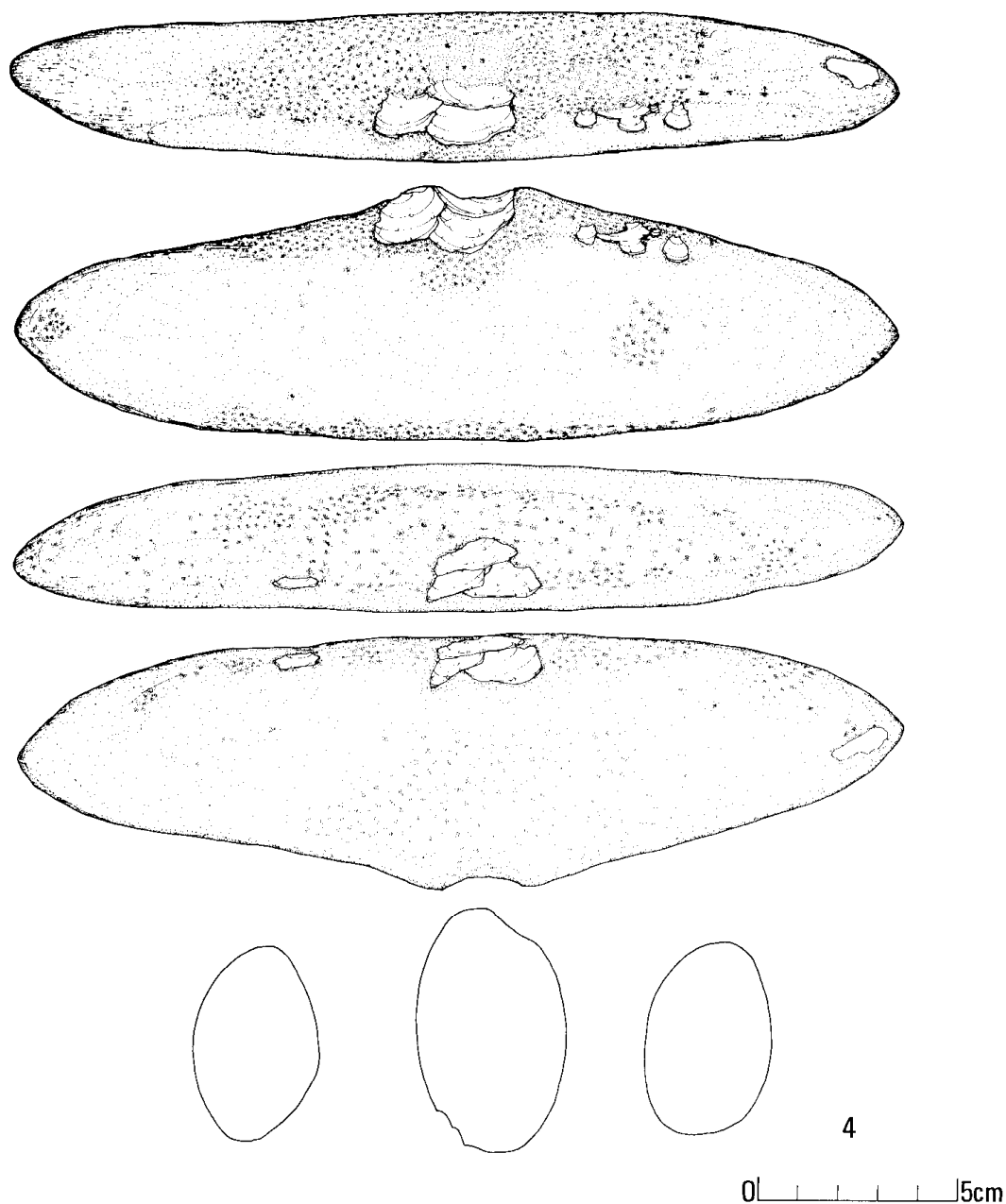
旧釧路市役所前出土(河野1958第3図)。黒色片岩質。裏面及び右側部分を欠損しているが、ほぼ左右対称の形態をもつと考えられる。断面形は楕円形であるが比較的細身のタイプである。現存する長さ13.3cm、幅4.1cm、厚さ2.4cm、重さ157.9gを計る。表面全体が入念に研磨されており、中央部で3.5cmの間隔で二条の節をもつ。断面三角形を呈し幅0.5cm、高さ0.4cmの高まりをもつ。中央部での溝はもたない。残された一方の端部は、石斧状に加工されており裏面の刃部付近を欠くがほぼ両刃形態を備えている。

(3) 釧路市公民館敷地出土(第2図3)

河野広道氏によると奈良氏発見とある(河野1958第2図)。砂岩質。右端部を欠損しており、現存する長さ14.4cm、幅4.1cm、厚さ3.5cm、重さ302.8gを計る。中央部とみられる位置に幅2.3～3.0cm、深さ0.2～0.5cmの溝をもつ。溝の内部は研磨調整が行なわれて



第2図 釧路市幣舞遺跡出土の独鈷石



第3図 独鈷石未製品

おらず、敲打痕が残されているが、凹凸をもたず細かく調整されている。溝以外の表面は全面が磨かれており、端部へ向かうに従って直線的に細まり、端部先端で尖鋭に作出されていた痕跡があり、現在は打撃痕が数箇所観察され、多少丸みをもつ形態を呈している。右側の破損した箇所は、ほぼ直角に欠けており縦からの力が加わり欠損した痕跡が認められる。

出土地不明の独鈷石未製品

第3図に示した独鈷石の未製品とみられる資料は、近藤昌夫氏の寄贈資料に含まれていたもので、出土遺跡は明らかでない。

砂岩質からなり、長さ22.2cm、幅6.3cm、厚さ3.6cm、重さ665.4gを計る。全体に独鈷石としての形態を思わせる資料である。中央部上面に溝状の窪みを作出したとみられる痕跡

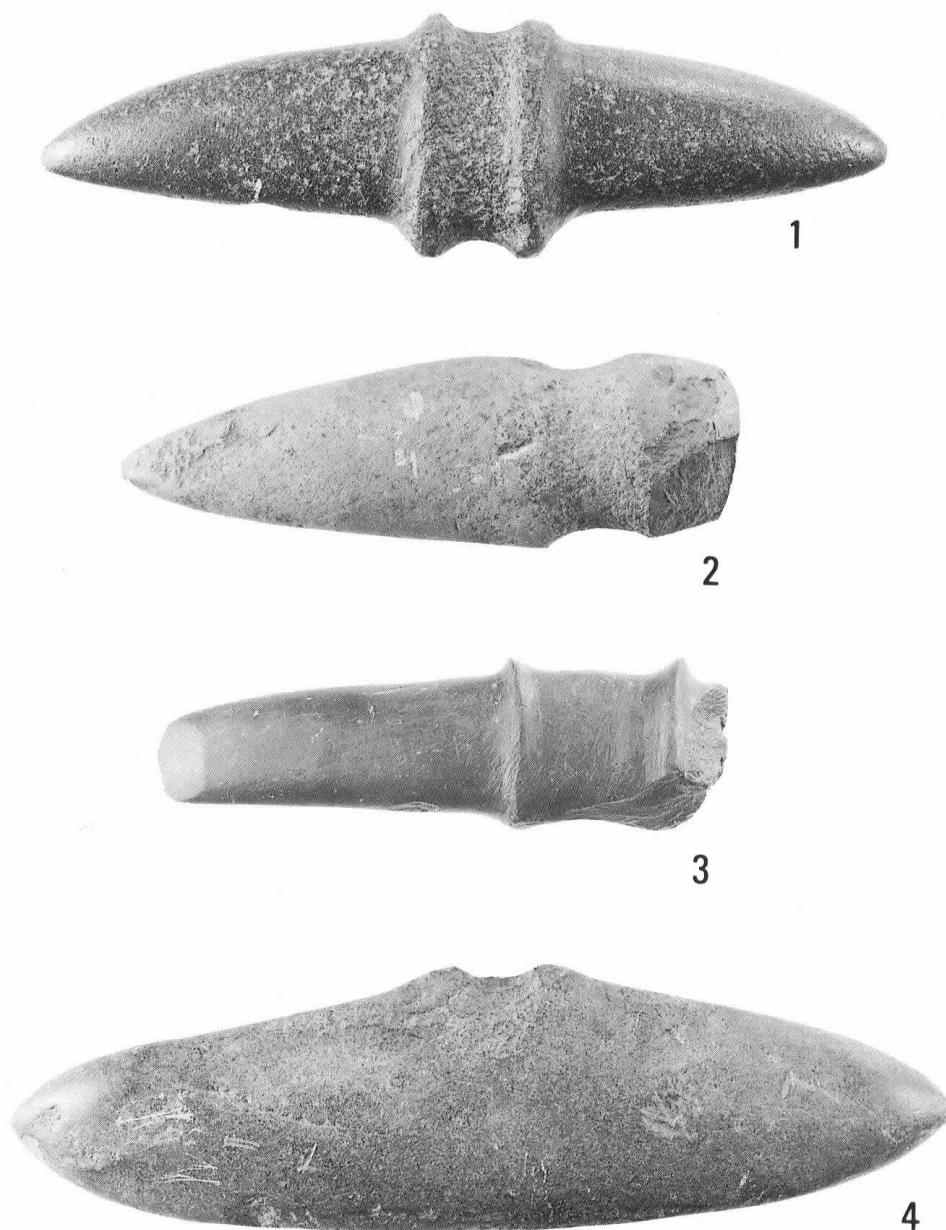


写真1 釧路市幣舞遺跡出土の独鈷石及び未製品

をもつが、部分的に施されているのみである。中央上面や下端部を除いて研磨されており、両端部も入念に磨かれている。

溝状の窪みや両端部の在り方、及び形態から、本資料は独鈷石の特徴を十分に備えたものと考えられ、独鈷石の作出過程及び機能を検討する上でも貴重な資料のひとつであると考えられる。

若干の考察

釧路市幣舞遺跡からは、現在のところ所在不明の2点を加え5点の独鈷石が出土していることは、再三にわたり述べてきたとおりである。一遺跡から5点の出土が何を意味するか、ここで言及すべき材料は持ちあわせていない。しかし、遺跡の性格が集落跡、墓跡であるところに検討すべき余地が残されている。

これまでの調査により幣舞遺跡からは、縄文晩期の幣舞式、緑ヶ岡式の住居跡、墓壇が検出されている。墓壇は、部分的な調査で結論づけられないが、比較的集中して検出されており、独鈷石の発見された範囲まで広く及ぶとは考えられない。しかし、江別市の例もあり(河野1970)、墓の副葬品としての性格に加え、生活面での検出もあり得ることをここで指摘することができる。このことは、独鈷石の機能とも深く関係しており、宗教的な儀具としての性格以上に日常使用される道具としての用途も十分に考慮する必要がある。また、独鈷石そのものが欠損している場合があり、その後の何らかの作用による破損であれば別であるが、使用時での破損も検討すべきであり、両端部の石斧状の刃部や尖鋭に加工された状況からも積極的に宗教的な要素を抽出することができない。刃部を作出する以上は日常の道具としての機能も十分に備えていたことを物語っているのである。さらに、第3図の未製品は独鈷石を作り出す過程での資料とみられ、同じ砂岩質の資料とともに、この地(出土地は明らかでないが)においても独鈷石が作られていたことを示している。

次に、この地方に独鈷石がもたらされた時期についてである。釧路市幣舞遺跡では、明らかに縄文晩期の幣舞式、緑ヶ岡式土器の時期に限定することができる。しかし、幣舞遺跡では必ずしも幣舞式土器の時期で占められるとは言えない。平成元年度の調査では、むしろ緑ヶ岡式土器の時期が主体を占めていた。従って、現段階では確実に幣舞式に限定できず、緑ヶ岡式を含めた時期の可能性を指摘するに留まらざるを得ない。

以上のことから北海道東部における独鈷石については、縄文晩期の幣舞式・緑ヶ岡式土器の時期に比定でき、宗教的な儀具としての性格とともに日常の生活用具としての機能を推測することが可能であることを指摘できる。

註1) 昭和9年11月1日の大東新聞によ

ると、近藤虎藏氏の所蔵品が紹介されており、河野常吉氏により独鈷石が確認されたことが記されている。

註2) 市立函館博物館で資料整理の折、独鈷石が1点見つかり常設展示室において公開されている。平成4年3月実見したが、田原吉信氏によると出土地は不明とのことで、これを加えると道内では16例となる。

引用・参考文献

- 宇田川洋校註(1983) 河野常吉ノート考古篇
2 北海道出版企画センター
- 宇田川洋編(1984) 河野広道ノート考古篇5
北海道出版企画センター
- 河野広道(1958) 釧路市出土のツルハシ形石器—(いわゆる独鈷石)— 釧路博物館新聞No.84 釧路市立博物館
- 河野本道ほか(1970) 先史時代 江別市史上巻 江別市
- 後藤壽一(1937) 札幌市及びその附近の遺跡・遺物の二・三に就いて 考古学雑誌27-9
- 屋川会編(1933) 北海道原始文化聚英 屋川会
- 澤 四郎(1966) 釧路地方の先史時代の貝塚及び骨塚(1) 釧路博物館報No.178. 179
- 澤 四郎(1969) 釧路川流域の先史時代 釧路叢書第11巻 釧路川その自然と生活 釧路市
- 澤 四郎他(1974) 自然・先史編 新釧路市史第1巻 釧路市
- 杉浦重信(1991) 北海道の独鈷石について—十勝考古学とともに—佐藤訓敏君追悼論集 十勝考古学研究所
- 西 幸隆・石川 朗(1990) 釧路市幣舞遺跡調査報告書 釧路市教育委員会